



140の初華

## 気持ち

---

あなたのことが好きで。いつも好きで。ずっと好きで。これからも大好きで。大切に。愛しくて。泣きたくて。笑いたくて。嬉しくて。悲しくて。恥ずかしくて。楽しくて。苦しくて。触れたくて。切なくて。美しくて。大好きで。大好きで。大好きで。愛しています。

## 会いたい

---

はやく会いたい。会いたい。逢いたい。もどかしくて、部屋中を歩き回った。始発電車の一時間前に駅に着いた。電車の中では膝の震えが止まらなかった。寝ているだろうな。さっきあれほど「アイタイ」と言った君は。携帯を握りしめながら。その姿をみて、抱きしめるために。

## 好き

---

好きだから「好き」って言いたいけど好きなのに「好き」って言えなくてだけ好きなら「好き」って言えばいいと思うし好きだったら「好き」って言ってほしいのに素直に「好き」って言えなくて言われなくて寂しくて泣きたいからちょっとこれから「好き」って言うてくる

## 花おばさん

---

いつもたくさんの花をつけた大きな帽子をかぶって自転車を漕ぐ花おばさん。秋はススキ。冬はポインセチア。誰も顔を見たことはない。ある冬の風の強い日、その帽子が吹き飛ばされるのを目撃。驚いたが、おばさんは構わず自転車を走らせた。その頭には、桜の花が咲いた小さな帽子。

## 褒め言葉

---

そのワンピースかわいいねってあなたが言う。ありがとうって私は答える。そのTシャツかわいいねって。スカートかわいいねって。髪が綺麗だね。目が素敵だね。足が細いね。胸が綺麗だね。鳴く声が好きだよ。君が大切だよ。愛してるよ。私は、赤くなって、ただ頷いた。

## 君は猫

---

君は猫。あっちへふらふらこっちへふらふら。今夜は誰と飲むだとか、明日は誰と買い物だとか、明後日はオールだとか。どこに何人男がいるとかいないとか。振り回されるのも面倒くさくなって、やがて俺は不貞寝する。朝になり布団をめくれば、丸くなって俺に寄り添う優しい寝顔。

フットワークの軽さは有名で誘いは耐えない。あの子との友情も疎かにできないし、あいつの誘いも断れない。あっちへこっちへやってるうちに、あ、彼氏がへこんだ。私も少し疲れたかも。ね、ベッドに潜り込んでいい？あなたの隣が、安心するの。私の寝顔にキスしていいよ。

## 冬の夜

---

冬の風が二人の体温を奪っていく。彼が私の風除けになってくれた。なんでそんなに優しいの？思わず彼の頬に手をやると温かいと言う。感覚もない手に温もりがあるはずない。なんでそんな嘘つくの？「俺ね、他に…」「別れよっか」聞きたくなくて私から。声を出さずに、泣き叫んだ。

## 年上の彼女

---

彼女は小さい。年上なのに小さい。小さいくせに姉御肌で上から目線。ついていく俺。いつもの関係。喧嘩の時は、ね、俺が大抵キレル。「別れよ」て言う。そしたら彼女、小さいのに膝抱えてもっと小さくなって涙声で「やだ…」て言うの。俺もうダメ。ぎゅってしちゃう。いつもの関係。

## イブ

---

イブの話すらしなかった。当たり前のように会っていた絶頂期はとうに過ぎた。バイトもいれた。イブが明けた朝方、疲れきった体で家に戻ると、彼女がドアの前に座っていた。俺を見つけると、ふらっと立ち上がって、涙目のくしゃくしゃの笑顔で言った。「おかえり」赤くなった頬で。

## 朝焼けのように

---

君は小鳥のように笑う。雪のように泣き、猫のように怒る。星空のように僕を包み、桜のように僕を癒した。君が去った夜、置き去りにされた細い金のリングを眺めていた。新聞配達の声が荒んだ心を洗う。空を見上げると、赤く輝く朝日が昇った。爆発みたいに、君の優しい微笑みが。

## 大切な君と

---

好きだからキスをしたいし、手を繋ぎたい。君に触れていたい。誰より近くにいたい。君の匂いを感じながら眠りにつきたい。温もりを感じながら目を閉じたい。いつの間にか私は笑っていて、泣いている。愛してるなんて言葉、かたどることもまだ不安だけど、それでも君が大切なんです。